

ラトヴィア語の実験音声学的研究事始

伊東えりか[†]

キーワード： ラトヴィア語、アクセント、音節構造、音響音声学、フィールドワーク

1 はじめに

私が真剣に音声学を志したきっかけは、高校在学中に所属していた合唱部で出会った、ラトヴィア語の歌だった。初めて聞くラトヴィア語の、日本語にも英語にもない、美しい音に惹かれてもいたが、何よりも興味を持ったのは、ラトヴィア語を発音するのは日本人にとって難しいことなのかもしれない、ということだった。当時、部員達がラトヴィア語の曲を演奏する際に苦戦したのは、ラトヴィア語には日本語にない、またはあっても日常会話においては使用する頻度が少ない音がある、と理解できても、それらの音を発音し分けられなかったり、ラトヴィア語独自の音を聞き分けられなかったりすることだった。しかし中には、ラトヴィア語と日本語との特徴的な差異を聞き分け、発音し分けられる仲間もいて、彼らは一様に、ラトヴィア語に苦戦している者達を不思議がっていた。

なぜ言語音を聞き分け、発音し分けられる者とできない者がいるのか、ということに好奇心をくすぐられた私は、音声学を学ぶのに十分な環境が整っている筑波大学に入学した。知識を得、音声学を担当して下さっている教授、城生佰太郎博士と相談の結果、フィールドワークを行った。研究対象はラトヴィア語である。

この小論は、その結果の中間報告である。

[†]筑波大学人文学類生

2 先行研究批判

日本で言語学に最初に触れようとする者は、おそらくまず三省堂『言語学大事典』を手に取るだろう。私もそういう者の一人だった。しかし、今回フィードワークで得られた結果とは異なる記述があった。

まず1点目に、アクセントについての記述部分を挙げる。『大事典』には「ラトビア語は、語の初頭音節に強い強勢アクセント (stress accent) をもつ、固定アクセント型の言語である。」(p.689) とあり、更に「アクセントの語頭化により、語末音節の弱화를著しく被った。」(p.同) と続くのだが、今回の調査では母音弱化的の足りない単語や全く現れない単語もあった。また、著者である村田郁夫氏は「ラトビア語の特徴として、長音節 (中略) にはイントネーション (音調) が現れ…」(p.同) としているが、ここは前後の脈絡から判断して、単語レベルの高低差について論じているので、イントネーションではなくピッチ (高さ) アクセントの誤りである。ただし、そうなる就先に引用したアクセントに関する記述は、ますます怪しくなってくる。本当に、ラトヴィア語のアクセントは強さだけでよいのか? 高さに関してはどのような現われ方をしているのか? など、従来の類型や記述に対して噴出してきた疑問点を、今回の調査で明らかにしたい。

2点目に、村田郁夫編 (1997) におけるラトヴィア語の音節の数え方を問題として挙げたい。今回の調査単語の中に、音響データとしては母音弱化的により音節数が増えたと思なすべきものが録音されていたのである。従来の音節の数え方に問題点がなかったかどうか、音声学的視点から改めて問いたい。

3 目的

以上から明らかなように、本研究の主たる目的は、『言語学大辞典』(三省堂、1992) における音声に関する記述のうちから、筆者の観察結果とは明らかに矛盾する

- ①アクセントの位置とタイプ、
- ②音節数の数え方、

の2点に関し、音響音声学的方法を用いることによって可能な範囲内で検証することである。

4 方法

4.1 被験者

本実験の被験者は、ラトヴィア語母語話者1名である。アポイントメントは、まずラトヴィア大使館に電話をかけ、実験の趣旨と骨子を説明した後、電子メールにて日時や場所など具体的な詰めをおこなった。被験者は、大使館側から選出された人材であり、こちらからは何のアプローチもしていない。また、被験者は調査者と直接連絡を取ってくださっていた方ではない。被験者の名前に関しては個人情報に属するため、仮名で示した。

名前	国籍	言語形成地	性別
A	ラトヴィア	リガ市	男性

4.2 調査語彙

詳細は後述するが、本実験ではある単語における日本語とラトヴィア語との意味範疇のズレが大きくなることをおそれて、指差しによる具体的な語彙調査を行った。この方法をとるにあたって、調査に用いる語彙は、被験者の前で容易に指差し行動ができ、かつ被験者に分かりやすいものであることが最低条件となった。そこで採用したのが、身体に関する語彙である。

採用した理由として、

- ①指差し行動が容易であり、また調査主の身体(の一部)を示せば被験者への無礼にはならないこと、
- ②身体に関する語彙は大抵のラトヴィア語辞書に豊富に掲載されていることから、被験者が発語した語彙が方言か否か、容易に判別

できること、

の2点が挙げられる。

以下に調査で用いた調査語彙一覧を掲載する(表1)。

表1: ラトヴィア語の音声調査語彙票

①pakausis【頭(後頭部)】	⑪zobs【歯】
②mati【髪の毛】	⑫vaigs【頬】
③piere【額】	⑬seja【顔】
④acs【目】	⑭kakls【首】
⑤asara【涙】	⑮plecs【肩】
⑥auss【耳】	⑯mugura【背中】
⑦deguns【鼻】	⑰krūts【胸】
⑧mute【口】	⑱vēders【腹】
⑨lūpa【唇】	⑲roka【腕】
⑩mēle【舌】	⑳elkonis【肘】

4.3 調査機材・調査方法

本実験で用いた調査機材は、デジタルカメラ(パナソニック DMC-FX30・LUMIX)であり、内蔵のマイクで録音をしつつ、被験者の口元をズームアップして録画した。また、本実験における調査、それに関連するコミュニケーションの一切は日本語で行った。

解析機材としては、杉スピーチアナライザー、Cool Edit 2000、Multi Speech3700 ver.2.5を併用した。

調査方法は、先の4.2で示したように、ある単語における日本語とラトヴィア語との意味範疇の差異を考慮し、指差しによる調査形式を採択した。被験者には事前に、次に調査者が示す身体の部位を、被験者の母語方言(ラトヴィア語リガ方言)では何というかを答えていただくよう、口頭と簡素なプリント(A4用紙1枚)にて説明した。

また、ラトヴィア語の名詞には格変化が起こるため、調査語彙1つにつき、単数形を格変化させた後、複数形を格変化させて発語していただいた。

よって、調査語彙1つにつき採取した語数は14である。更に、被験者からの提案により、発話の際の混乱を避けるため、途中から格変化の前に前置詞を入れて発話していただくこととなった。

5 結果

解析した結果、今回の調査で従来説の反例を示す語がいくつか見つかった。以下に、その例を列挙する。特に指示がない場合、全て単数形主格について述べるものとする。なお、各行頭につけてあるマル番号は、原著の番号を示している。

- (1) ①pakausis (後頭部) において、最終音節の /i/ が弱化しない。
- (2) ②mats (髪の毛) 複数形主格において、最終音節の /i/ にアクセント (強さ) がきている。
- (3) ⑧mute (口) の前置詞を含む単数形主格 /ka mute/ において、第一音節から第三音節にかけて、母音が弱・中強・強と徐々に音圧が上がっていった。すなわち、主強勢は最終音節にあった。
- (4) ⑨lūpa (唇) において、音圧としては第一音節が強いが、ピッチは第二音節の方が高かった。
- (5) ④acs (目) におけるフォルマント数値から判断して、/a/ の自由異音には、前舌の [a] から後舌の [ɑ] まで含まれる可能性が高い。
- (6) ⑭kakls (首) において、/l/ の音がフラップ [ɾ] だったり、ふるえ音 [r] だったりする場合が見受けられた。
- (7) ⑮plecs (肩) において、/p/ と /l/ の間に軽微のフォルマントが出ていることから、シェワー [ə] が挿入されている可能性が高い。
- (8) ⑰krūts (胸) において、/l/ と /s/ の間にフォルマントが出ていることから、ここに [i] が挿入されている可能性が高い。
- (9) ⑳elkonis (肘) において、語末の2音 /is/ が脱落し、その直前の /n/ が [m] に変化している。

6 考察

今回の調査結果から、大きく

- ①アクセント課題、
- ②自由異音課題、
- ③音節構造課題、

の3つの問題を論じる。

まず、前半の(1)~(4)における問題点は、『言語学大事典』[アクセントとイントネーション](p.689)の項に述べられている「初頭音節に強勢を持つ固定アクセント」という定義が、不当であることを明示している。

すなわち、(1)の事実から、非頭音節に立つ母音が必ずしも弱化しないことが指摘されたことになり、そうだとするとラトヴィア語のアクセントは必ずしも強さアクセントとは言い切れないのではないかと判断せざるを得ないからである。なぜなら、金田一春彦(1967)のアクセント類型以来の定説として、強さアクセントを持つばあいには必ず母音弱化をとまなうことが明らかにされているからにほかならない。

次に、(2)~(4)の事実によって、ラトヴィア語は語頭以外の位置にもアクセントを有することが明らかである。よって、ラトヴィア語のアクセントは固定アクセントではないということになる。

さらに、第2節の「先行研究批判」のところでも述べたとおり、ラトヴィア語には強さだけではなく高さの観点からもアクセントを精査する必要があることになる。以上の理由から今後ラトヴィア語のアクセントを考察する際には、まずは精度の高い音声学的研究から着手しなければならないことを、ここに強調しておく。

(5)の課題からは、/a/の異音にはかなりの程度の広がりがあり、後舌の[a]から前舌の[a]までをカバーしていることが明らかにされた。

(6)の課題からは、/l/に該当する異音にはふるえ音の[r]だけでなくはじき音の[r]も含まれることが明らかにされた。しかしながら、『言語学大事典』の村田郁夫編(1997)にも[a]、[r]は記載されていない。

音節構造の課題については、(7)・(8)の解析で明らかになったように、

子音が連続すると表記されている箇所にはフォルマントが見えるため、音響音声学上は音節が増える可能性があることが分かった。これにはドゥ・ソシュール (de Saussure, 1916) の aperture 説、モーリス・グラモン (M. Grammont, 1933) の提唱した漸弱漸強音説が援用できるように思う。この観点から音節を再考察すると、(7)・(8) は 2 音節から 3 音節に音節が増える。但し、音声学的に音節構造を再構築する際には、音響データだけでは不十分なところがあり、生理・聴覚実験を行った上で改めて検討する必要もある。

(9) の課題からは、音節数が減少することを指摘したことになる。これこそは、まさに非頭音節に見られる母音弱化の典型的な例であろう。すなわち、初頭音節にアクセントがきていることから語末の /i/ が弱化し、直後の /s/ に影響を及ぼしたばかりでなく、直前の /n/ までをも巻き込んで音変化が起こり、ついには 3 音節が 2 音節に縮小してしまったと考えることができる。

以上に述べたように、言語学における音韻論では、ラトヴィア語のような非示差的アクセントに対しては一般にきわめて冷淡な扱いしかしない。しかし、音声学では音の量的変化を中心に、社会習慣的なプロソディーパターンをしっかりと観察し記述することを主たる目的としている。したがって、ラトヴィア語のような言語のアクセントこそは、音声学的側面から「音声学的アクセント」という術語のもとに、精緻を極めた研究を行ってゆかなければならないものとする¹。

7 結論

本稿では、『言語学大事典』、村田郁夫編 (1997) に記載されている、ラトヴィア語のアクセント分類と一部の分節音における自由異音の種類、さらには音節構造に関する矛盾点を、主として音響音声学の立場から明らかにすることを目的とした。以下に実験結果をまとめる。

¹城生佐太郎 (2008b) の第 7 章「アクセント論」にも、同様の指摘がある。

- 1) 『大辞典』においては、語の初頭音節に強勢アクセントを持つ、固定アクセント型の言語であるとされているが、実験では固定アクセント型ではない例が発見され、強さばかりでなく高さアクセントをも持つ可能性があることが判明した。
- 2) 『大辞典』にも、村田郁夫編 (1997) にも記載されていないが、[a] と [ɑ]、[r] と [ɾ] が自由異音の関係にある可能性が示唆された。
- 3) 村田郁夫編 (1997) に記載されている音節構造に、音声学的観点からは弱化母音を見落としている可能性が明らかにされ、この結果一部の例で音節数の増加が指摘された。いずれも表記上は子音が連続している箇所にフォルマント (すなわち、音響音声学的に定義される母音) が出ていることに起因する。

また、音変化や母音弱化による音節構造の変化もありうるということが判明した。

8 展望

本稿では、先行研究にみられる矛盾点を明らかにするという姿勢をとったが、今後はその問題点をどのように解決し発展させることができるのかについて検討していきたい。またフィールドワークについて、今回初めてだったこともあり、被験者の方には大変なご迷惑をおかけしてしまった。今後は被験者の方にも調査者にも気持ちの良い、効率的な方法を模索していきたい。

【参考文献】

- 金田一春彦 (1967) 『日本語音韻の研究』 東京堂出版
 国立国語研究所 (1981) 『日本言語地図解説—方法—』 国立国語研究所
 城生佰太郎 (2008a) 『実験音声学入門』 サン・エデュケーショナル
 城生佰太郎 (2008b) 『一般音声学講義』 勉誠出版
 村田郁夫 (1992) 「ラトビア語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大事典 第四巻 世界言語篇 (下-2) ま-ん』 687-694.三省堂
 村田郁夫編 (1997) 『ラトビア語基礎—五〇〇語』 大学書林

de Saussure, Ferdinand (1916) *Cours de Linguistique générale*. Payot: Paris.

Grammont, Maurice (1933) *Traité de Phonétique*. Delagrave: Paris.